

# 月経の医学的障害についての大学生の 認識に対する学習による変化の検討

川瀬 良美\*

## 問題と目的

川瀬は、近年、医学の立場から月経がもたらす障害を問題とする論議があることに着目した。その論点として月経を抑制することを主張する論議が展開されていることから (Segal, 2001, 玉田, 2001, 松本2001), 月経への意識と月経を抑制することについて大学生の意識 (川瀬, 2009a) ならびに保健・医療に関わる専門家の意識 (川瀬, 2009b) について報告した。その結果からは、女性は月経を面倒だと感じている一方で、月経は女性の健康と独自性の証として重要なものであるとの認識をもっていた。また、月経を人工的に操作することを自然のメカニズムに逆らうことで身体的に問題が起こるのではないかと不安を感じていた。この結果は、月経のある生活について女性はアンビバレントな心理であることを示していた。学校教育では、月経が女性の健康な証であるのみ学んでおり、障害をもたらす現象であるとの認識はない。また、女性達は、月経が将来子どもを産むために必要な機能であることを重要視しており、そのためには現在もたらされている不快や不都合は耐えるべきことであるとか、我慢しようという気持ちであることが明らかになった (川瀬, 2006)。

一方、月経を医学的障害として問題とする立場からの「月経があって良いことは何もないのであるから抑制すればよい」との提案に対してそのまますんなりと受け入れられないとはいえ、そうすることで問題がなければそうしたいという気持ちもあった。19世紀後半から21世紀にかけての急激な生活環境の変化に、女性の身体が適応的に変化していないのであればこのような時代性をもった医療行為への方向性をやみくもに「否」とするのではなく、問題点の明確化と正確な情報提供によって、身体生理的および心理的適応を援助する方策がはからなければならない (川瀬, 2009a)。

しかし、この問題が「疾患を治療する」という単純な問題ではないことから、この問題を考える視点をどこに据えたら良いのかを考えなければならない。様々な立場からの見解を結

---

\*総合福祉学部 教授

集したコンセンサスが導き出されることで、女性達の選択肢への指針が提出できるのではないだろうか。

そこで本研究では、月経は健康な証としての認識から、障害をもたらすとの月経の医学的障害について学習したことが、大学生の月経への認識にどのような影響を与えるかについて、事前調査と事後調査を比較してその変化について検討することを目的とする。

ここでいう「月経の医学的障害」とは第53回日本産科婦人科学会のシーガル博士の講演報告(2001)から、その概要を整理すると以下の5点であるが、対策としては月経を抑制することであるとしている。

### 1. 月経週数の増加

初経が早くなり閉経が遅くなる傾向と、妊娠・出産・授乳の回数ならびに期間の短縮により、月経回数が飛躍的に増加している。アメリカ開拓時代は150周期で、現代はその3倍の450周期となった月経周期の増加が、医学的障害の増加の原因と考えられる。

### 2. 月経に関連した医学的障害

月経と直接関連した医学的障害として、月経困難症、月経前症候群(PMS)、子宮内膜症、鉄欠乏性貧血などが発症している。

### 3. 月経時に悪化させる医学的障害

既存の慢性疾患、偏頭痛、喘息、リウマチ性関節炎、てんかん、過敏性大腸症候群、等が月経時に悪化する。

### 4. 月経周期数と比例して発症する疾患

月経週数の増加に比例して卵巣癌、子宮内膜癌が発症するとの報告がある。

### 5. 月経の抑制の利点

月経周数が少ないほど、月経関連医学的障害が少ない。その意味からは、ホルモンによる排卵抑制による無月経期間をつくることにより、月経関連障害を減少することができ、健康上の恩恵が増える。

以上

## 方 法

事前調査として、これまでの月経に関する意識についての30項目について4段階評定での質問紙に回答を求めた。その4週間後にその調査結果を報告し、続いて「月経の医学的障害」(Segal, 2001, 玉田, 2001, 松本2001)についてレクチャーを実施した。その直後に、事前調査と同一の30項目について、レクチャーを聞いてどのように認識が変化したかとの問いかけによって回答してもらい、その結果を事後調査とした。また、事前調査に合わせて月経関連の認識についての質問を設定した。質問としたのは、「女性に月経がなければ良いと考えることがあるか」、「月経のあることが害になるということを聞いたことがあるか」、「健

康な月経周期を、人工的に（薬を用いたりして）止めたり復活させたりすることは問題があるか」の3点について「はい」あるいは「いいえ」で回答を求めた。

## 結 果

### 1. 対 象

女性発達心理学を履修している学生 151名（事前・事後調査の両方に解答した者）  
項目によって対象者数が異なるのは、有効回答数を分析対象としたことによる。

- (1) 性 別 男性：34名  
女性：117名
- (2) 学科別 心理学科・実践心理学科：115名  
社会学科・人間社会学科：5名  
社会福祉学科：31名
- (3) 女性に月経がなければ良いと考えることがあるか：  
はい 116名 (78.4%)、いいえ 32名 (21.6%)
- (4) 女性に月経のあることが害になるということを知ったことがあるか：  
はい 21名 (14.2%)、いいえ 127名 (85.8%)
- (5) 女性の健康な月経周期を、人工的に（薬を用いたりして）止めたり復活させたりすることは問題があるか：はい 109名 (73.6%) いいえ39名 (26.4%)

### 2. 因子分析結果

事前調査の30項目について $\alpha$ 係数を求めたところ.68以上であったことから一定の内的整合性が認められたので全項目を分析の対象とした。因子の抽出にあたっては、探索的に構造を解明するという本研究の目的から、“因子得点推定値のもつ統計的性質の好ましき”や“1つの変数に関与する因子でも抽出する”（市川・大橋・浜田, 1987）などの特徴から主成分分解により因子分析を行なった。2因子から順次バリマックス回転によって因子の解釈を試みた。バリマックス回転後の因子負荷量.4以上の固有値の大きく下がる4因子が安定的でしかも解釈が可能であったので4因子を抽出し、表1に示した。

表1より、第1因子は「16. 子どもを産まないと考えている女性は、月経を停止させてしまっても良いと思う」「12. 子どもを産まないと考えている女性には月経は不要であると思う」「4. 月経は子どもを産む人だけに必要であると思う」など月経は出産に必要であるという考えに関連した8項目に高い負荷量を示しているため「出産時必要因子」と命名した。第2因子は、「8. ナプキンの購入などにお金がかかるので、月経は出来るだけ早く終わらせた方が良いと思う」「23. 月経が無かったら、女性は女性であることをもっと肯定的に考えら

表1 月経に関する30項目についての因子分析結果

因子名	項目内容	F 1	F 2	F 3	F 4	共通性
出産時必要因子	16. 子どもを産まないと考えている女性は、月経を停止させてしまっても良いと思う	73	34	-2	-15	67
	12. 子どもを産まないと考えている女性には月経は不要であると思う	73	38	-3	-6	68
	4. 月経は子どもを産む人だけに必要であると思う	63	24	19	-14	51
	5. 子どもを産んだ後、産む予定がないなら月経は必要ないと思う	61	49	-1	-22	66
	*17. 意図的に月経を停止させることは、女性のアイデンティティに問題をもたらすと思う	-49	0	33	9	36
	*27. 月経があることは女性としてのアイデンティティの重要な構成要素であると思う	-53	-1	51	4	54
	*13. 月経は子どもを産む、産まないに関わらず女性にとって必要な生理機能であると思う	-66	-19	33	8	59
*20. 子どもを産まないと考えている女性でも、月経を止めることは望ましくないと思う	-72	-23	15	17	62	
月経不要因子	8. ナプキンの購入などにお金がかかるので、月経は出来るだけ早く終わらせた方が良くと思う	11	69	3	4	50
	23. 月経が無かったら、女性は女性であることをもっと肯定的に考えられると思う	10	65	-15	-4	45
	25. 月経があるから随伴症状に苦しめられるのだから月経は無ければよいと思う	22	64	-19	7	50
	7. 随伴症状で苦しんでいる人が多いので、月経は出来るだけ早く終わらせた方が良くと思う	32	61	9	-5	49
	19. 月経は必要ないときは停止しておいて、必要なときだけ復活させられたら良くと思う	48	59	-7	-1	58
	9. 子どもを産む時期だけ月経があれば良くと思う	45	50	-5	-20	50
	22. 月経が無かったら、女性はもっと自由に生活できると思う	15	48	-12	-2	27
11. 月経を自由自在に停止させたり、復活させたり出来たらよいと思う	37	45	-11	21	40	
女性性象徴因子	3. 月経は女性性の象徴(シンボル)として重要であると思う	-41	-9	58	0	52
	10. 月経が周期的にあることが女性の身体にとって重要であると思う	-9	-1	58	20	38
	2. 月経は健康な女性の証(あかし)であると思う	-7	6	57	12	35
	26. 月経があることは女性としての性同一性獲得に重要な要因であると思う	-31	0	56	-4	42
	1. 月経は子どもを産むために必要であると思う	3	-14	55	3	32
	24. 月経が有ることを女性の特性として女性は誇りに思う	-48	-15	54	-10	56
	15. 周期的に起こる月経は、からだ全体の周期的変化と関係していると思う	4	-32	54	19	43
	18. 月経は健康のシンボルであるから、周期的にあることを確認することは重要であると思う	-28	-9	53	31	46
6. 初経から閉経までは、月経を周期的に持続させることが健康によいと思う	17	-9	51	26	37	
14. 月経が周期的にあるのに人工的に停止させてしまうことは身体に害をもたらすと思う	13	-25	40	5	16	
無月経危機感因子	29. 成人女性の月経が、止まった無月経状態であることは危機的な重大な問題だと思う	-9	-1	18	79	66
	28. 成人女性であるのに月経が無いことは、危機的な重大な問題だと思う	-17	4	13	77	63
	30. 月経が止まったと聞いたら、深刻な問題が起こっている何とかしなければと思う	-17	9	19	71	58
	*21. 初経から閉経まで月経を繰り返していることは、身体に害になると思う	2	31	-10	-40	27
固有値	4.79	3.71	3.57	2.37		
累積寄与率	48.2					

\*印は、反転項目を示す

れると思う」など月経が無ければよいと考える内容に関連した8項目に高い負荷量を示していたので「月経不要因子」と命名した。第3因子は、「3. 月経は女性性の象徴（シンボル）として重要であると思う」「10. 月経が周期的にあることが女性の身体にとって重要であると思う」「2. 月経は健康な女性の証（あかし）であると思う」など月経を女性性の象徴とすることに関連した10項目に高い負荷量を示していたので「女性性象徴因子」と命名した。第4因子は、「29. 成人女性の月経が、止まった無月経状態であることは危機的な重大な問題だと思う」「28. 成人女性であるのに月経が無いことは、危機的な重大な問題だと思う」「30. 月経が止まったと聞いたら、深刻な問題が起こっている何とかしなければと思う」など月経がないことは危機的なことであるとの考えに関連した4項目であったので「無月経危機感因子」と命名した。第1因子の固有値は4.79, 第2因子の固有値は3.71, 第3因子の固有値は3.57, 第4因子の固有値は2.37, で累積寄与率は48.2%であった。

各因子の $\alpha$ 係数は、第1因子.87, 第2因子.81, 第3因子.78, 第4因子.71あった。

### 3. 事前・事後の評定平均値とその検定結果

因子分析の結果によって得られら4因子について、因子を構成する項目評定値の合計を項目数で除した数値を因子平均値とした。事前調査と事後調査のそれぞれについて因子平均値を算出し、事前・事後の各因子の平均値に統計的有意差があるか対応のある t 検定を行った。結果を図1に示した。

図1より、第1因子（以下、f 1）「出産時必要因子」（A： $t=2.71, p<.01$ ）と第2因子（以下、f 2）「月経不要因子」（B： $t=11.71, p<.0001$ ）、は有意に高くなり、第3因子

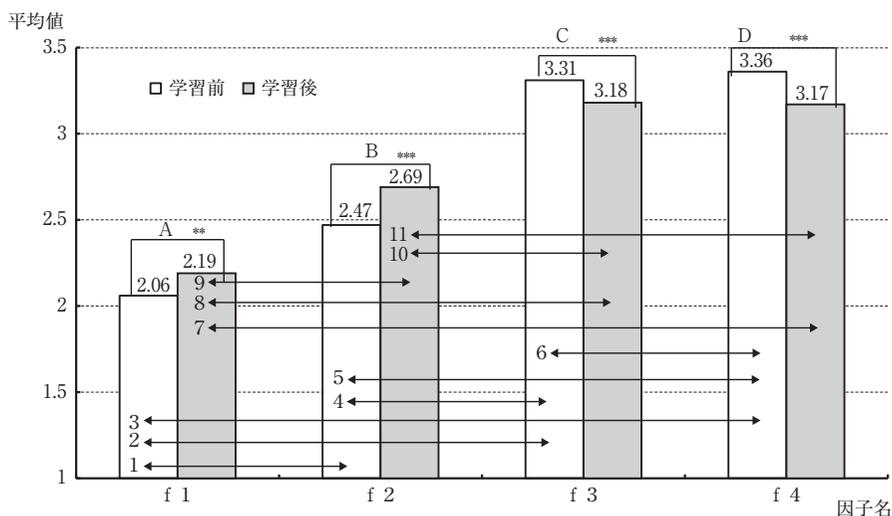


図1 月経についての認識の変化

(以下,  $f_3$ )「女性性象徴因子」( $C: t=3.64, p<.001$ )と第4因子(以下,  $f_4$ )「無月経危機感因子」( $D: t=4.40, p<.0001$ )は有意に低くなるという変化であった。

#### 4. 月経にたいする認識の違いによる評定平均値と検定結果

月経に対する認識として設定した質問は、「女性に月経がなければ良いと考えることがあるか」、「女性に月経のあることが害になるということを聞いたことがあるか」、「女性の健康な月経周期を、人工的に(薬を用いたりして)止めたり復活させたりすることは問題があるか」であった。これらを独立変数として4因子の平均値を算出し、認識の相違によって平均値に有意差があるか  $t$  検定によって検討した。結果は表2に示した。

表2 月経についての認識の相違による平均値の差の検定

( ) 内SD

	月経が無ければ良いと考えるか			月経の医学的障害について知っていたか			月経を操作することは問題があるか		
	はい	いいえ	t 検定結果	はい	いいえ	t 検定結果	はい	いいえ	t 検定結果
因子・前後別	116	32	有意水準	21	127	有意水準	109	39	有意水準
f 1 前	2.11 (.54)	1.87 (.37)	$t=2.08, p<.05$	1.89 (.46)	2.08 (.52)	N.S.	2.02 (.50)	2.13 (.52)	N.S.
f 2 前	2.54 (.50)	2.20 (.35)	$t=3.09, p<.01$	2.28 (.43)	2.50 (.49)	N.S.	2.44 (.49)	2.54 (.45)	N.S.
f 3 前	3.28 (.32)	3.43 (.35)	$t=2.02, p<.05$	3.40 (.29)	3.30 (.34)	N.S.	3.33 (.34)	3.28 (.32)	N.S.
f 4 前	3.39 (.47)	3.26 (.37)	N.S.	3.52 (.30)	3.34 (.48)	N.S.	3.38 (.42)	3.32 (.52)	N.S.
f 1 後	2.21 (.57)	2.11 (.43)	N.S.	2.05 (.53)	2.22 (.55)	N.S.	2.15 (.54)	2.31 (.52)	N.S.
f 2 後	2.74 (.55)	2.53 (.42)	N.S.	2.51 (.46)	2.72 (.54)	N.S.	2.64 (.52)	2.85 (.50)	$t=2.00, p<.05$
f 3 後	3.19 (.41)	3.16 (.35)	N.S.	3.25 (.36)	3.17 (.29)	N.S.	3.20 (.31)	3.14 (.31)	N.S.
f 4 後	3.20 (.48)	3.05 (.37)	N.S.	3.15 (.29)	3.18 (.48)	N.S.	3.16 (.47)	3.20 (.41)	N.S.

表2より、有意差があったのは、「女性に月経がなければ良いと考えることがあるか」についての  $f_1$  そして  $f_2$  について事前調査で「はい」と回答した対象者の平均値が「いいえ」と回答した対象者の平均値より有意に高かった。しかし  $f_3$  は「いいえ」が有意に高かった。事前の  $f_4$  と事後の  $f_1 \sim f_4$  までのいずれの因子にも有意差は示されなかった。「女性に月経のあることが害になるという月経の医学的障害について聞いたことがあるか」については事前・事後のいずれの因子においても両群間に有意差は示されなかった。また、「女性の健康な月経周期を、人工的に(薬を用いたりして)止めたり復活させたり操作することは問題があるか」については、事後の  $f_2$  のみに有意差が示され、操作することは問題ないと認識する対象者の平均値が有意に高かった。

### 5. 月経が無ければ良いと考えることがあるかの認識の相違に対する学習による変化

月経が無ければ良いと考えることがあるかの有無による相違に対する学習による変化を検討し、評定平均値とその検定結果を図2に示した。

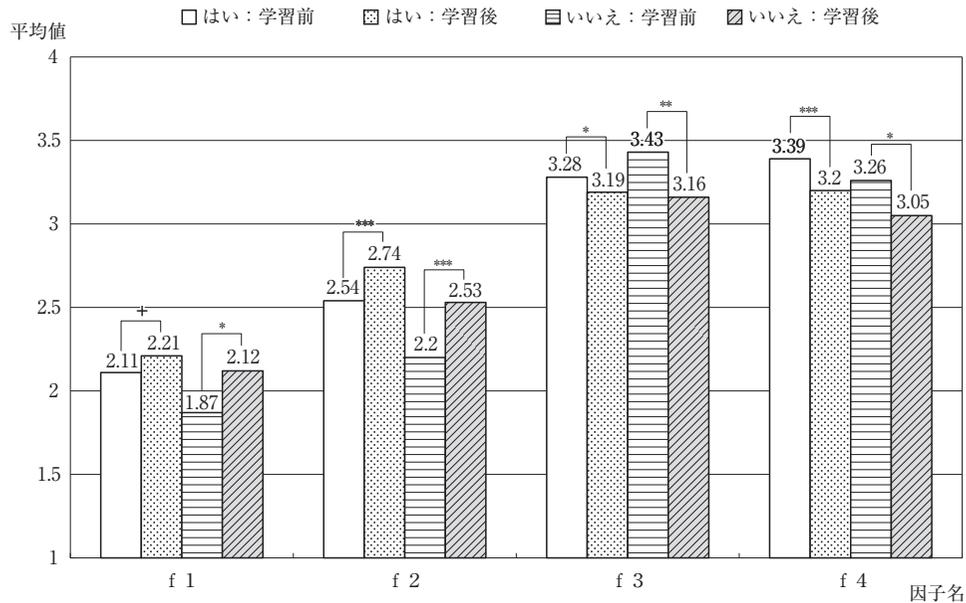


図2 月経が無ければよいかの認識の差異別による学習の影響

図2より、月経が無ければ良いと考えることがあると回答した対象者は、f1は高くなる傾向、f2は有意に高くなり、f3とf4は有意に低くなった。一方、月経が無ければ良いと考えることは無いと回答した対象者は、f1とf2は有意に高くなり、f3とf4は有意に低くなるという結果であった。

### 6. 月経の医学的障害について事前に知識があったかの相違に対する学習による変化

月経の医学的障害について事前に知識があったかの相違に対する学習による変化を検討し、その評定平均値とその検定結果を図3に示した。

図3より、月経の医学的障害について事前の知識があったと回答した対象者は、f1およびf2について事後の評定値が高くなっていることが読み取れたが、有意差があったのはf2のみであった。また、f3とf4については事後の評定値が低くなっていることが読み取れたが、有意差があったのはf4のみであった。

一方、事前の知識が無かったという対象者は、f1およびf2ともに事後が有意に高くなり、f3とf4が有意に低くなった。

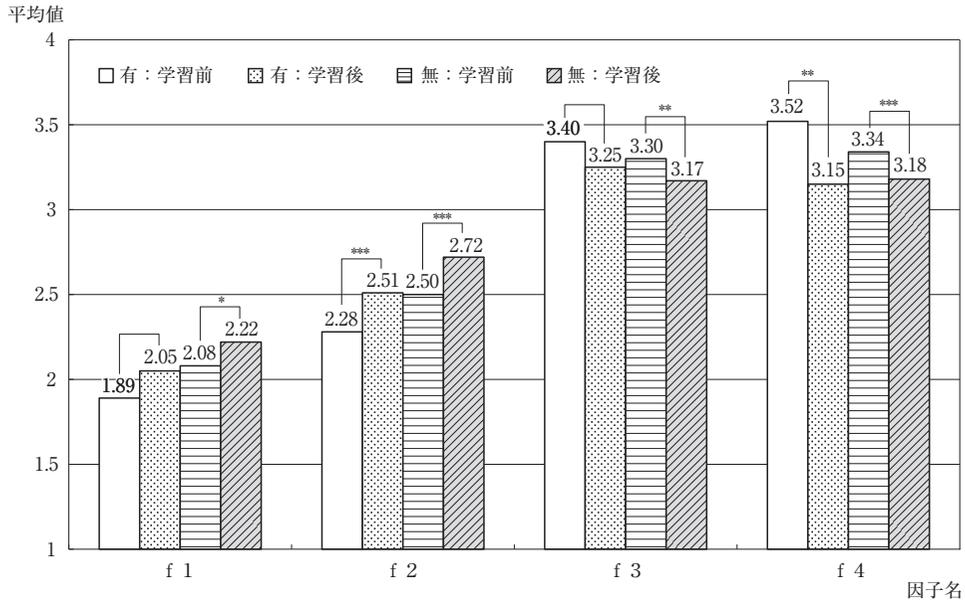


図3 月経の障害についての事前知識有無別による認識の変化

7. 女性の健康な月経周期を、人工的に（薬を用いたりして）止めたり復活させたりすることは問題があるかについての認識の相違に対する学習による変化

問題性の認識の有無の相違によって学習による変化に相違があるか検討し、その評定平均値と検定結果を図4に示した。

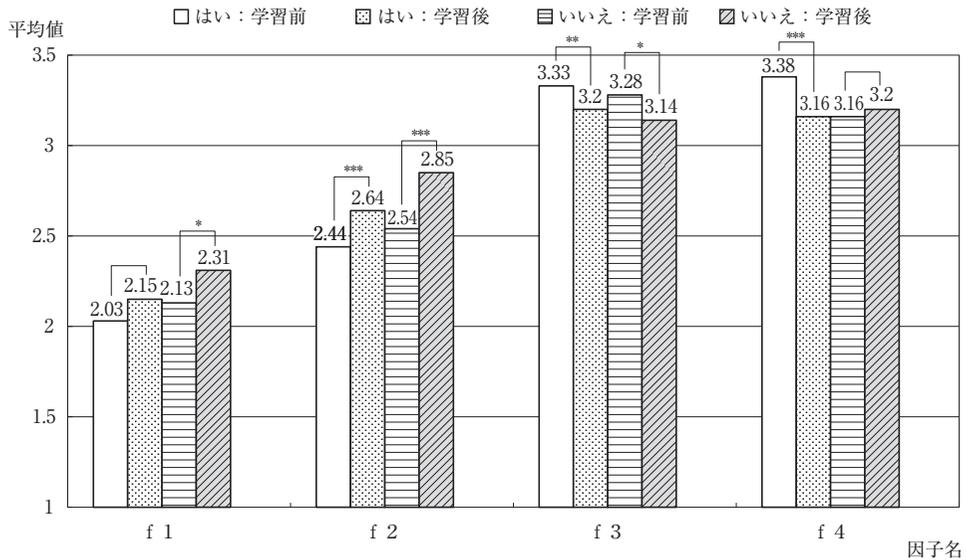


図4 月経を操作することは問題かの認識別の変化

図4より、月経を人工的に操作することは問題であると回答した対象者は、f1およびf2は事後に平均値が高くなっていることが読み取れるが、有意差があったのはf2のみであった。またf3とf4についていずれも事後が有意に低くなった。

一方、人工的に操作することは問題無いと回答した対象者は、f1とf2のいずれも事後が有意に高くなった。また、f3は有意に低くなったがf4は有意差は示されなかった。

## 考 察

### 1. 事前・事後の評定平均値とその検定結果

因子分析の結果、「出産時必要因子」：f1、「月経不要因子」：f2、「女性性象徴因子」：f3、「無月経危機感因子」：f4の4因子が得られた。f1とf2は、月経を女性の生活から排除したいという月経に対しての否定的な認識の項目で構成されていた（表1参照）。これらの因子は事後に有意に平均値が高くなっていたことから、月経の医学的障害という問題について知識を獲得することで、月経を排除したいという意識が高まったといえる（図1）。一方、f3とf4は、月経が女性を象徴する現象で、健康にとっても重要であるという認識の項目で構成されていた。これらの因子は、事後に有意に平均値が低くなっていた。この結果から、月経が障害になることを学んだことで、月経への女性性の象徴、健康の指標という認識が低くなった。この結果は、月経の医学的障害という問題点についての1回の学習で、その肯定感には有意に低下し、否定的な認識が高くなったことを明らかにした。女性は月経が健康のシンボルであると教育されていることから、月経が有害であるという認識については百八十度転換させる必要がありそれには心理的困難があるとしたが（川瀬，2009a），この結果からは学習による認識の変化の可能性を示唆していた。

しかし、ここで着目しなければならないのは、各因子間の平均値の差である。相互に検討した結果（図1参照）、f1とf2の事前・事後の平均値は、f3とf4の事前・事後の平均値のいずれにおいても有意に低かったということである。この結果は、対象者が月経は女性の象徴であり健康の証であるとの認識を強く確信していることを示している。その意味では、学習の後に心理的葛藤が強くなったことも推察され、月経の医学的障害という新たに月経に付与された課題を受容するためには心理的支援の必要性が指摘できる。

### 2. 月経に対する認識の違いによる評定平均値と検定結果

独立変数として設定した3つの問いに対する月経の認識についての回答では（表2参照）、「月経が無ければ良いと考える」に「はい」と回答した対象者の事前調査の結果でf1とf2という月経への否定的な認識が強く、f3という月経を女性の象徴とする肯定的認識が低かった。しかし、月経が無ければよいと日常的に感じている女性でも、月経が無いことへの

危機感は無ければよいと思わない対象者と同程度に評定しており、月経があることが女性の健康であるとの認識を持っていたといえる。この結果からは、月経を否定的に認識する原因として諸要因が指摘されているが、その原因の改善への援助がなされる必要がある。多くは下腹痛などの不快を伴う月経随伴症状である(川瀬, 2006, 2009a)。それらの問題から月経が無ければ良いと考えるが、女性の健康の証として無ければ危機的であるとのアンビバレントな心理的による葛藤がもたらされることが示唆された。

また、「健康な月経周期を、人工的に(薬を用いたりして)止めたり復活させたりすることは問題があるか」について事後のf 2においてのみ事前に有意差が無かった「はい」と「いいえ」の2群間に有意が示された。この結果は、学習の後に問題無しとする認識がより強くなったことを示している。これは、月経を抑制するとはどのようなことであるかについて正しい認識することが、月経の抑制について考える出発点となることを示唆している。その意味では、月経を抑制することの是非の論議と共に、操作することは問題とする理由として、体にとって自然がよいとの認識から月経を抑制することへの抵抗感を明らかにしていた(川瀬, 2009a, 2009b) ことに着目する必要がある。

### 3. 月経の医学的障害についての学習による影響

#### (1) 月経が無ければよいとの認識の違いに対する学習による変化

月経が無ければ良いと考えているかについての問いへの回答による相違によって学習による変化に顕著な特徴はなかった。f 1とf 2の月経への否定的な認識はより高くなり、f 3とf 4という月経への肯定的な認識は低下した。学習によって否定的な気持ちは強まり、肯定的な認識が弱まったといえる。この結果からは、月経の医学的な障害についての教育の影響を認めることができる。月経が無ければよいと考える理由は月経随伴症状である。月経随伴症状は月経を有する女性の全ての年代において月経前(58.4~93.5%)、月経中(70.0~95.5%)を通じて自覚されている(MSG研究会, 1990)。重篤度は異なるとはいえ、多くの女性が周期的な月経に伴う随伴症状に苦しんでいる現状がある。特に、月経困難症などの痛み症状は、随伴症状を増幅し生活の質を著しく低下させている(川瀬, 2006, Kawase & Matsumoto, 2006)。その中で、月経が害となるとの指摘は、月経への否定的な気持ちを増長させ、肯定的な気持ちを低下させた結果は矛盾しない。この結果からは、これまでの教育において、月経の必要性和その意義は伝えてきたが、随伴症状改善への教育が十分では無かったことを示唆している。

#### (2) 月経が「害」になることへの認識の違いに対する学習による変化

月経が「害」になるということを知っていたかについての回答の相違によって学習による変化に顕著な特徴はなかった。f 1とf 2の月経への否定的な認識はより高くなり、f 3と

f 4という月経への肯定的な認識は低下した。その動向は、月経が「害」になるとの事前の知識の有無による特徴的な相違は示されなかった。但し、事前に知識があった対象者のf 1とf 3に有意差が示され無かった結果と、知らなかった対象者がすべて有意に変化していたとの結果からは、事前に知らなかったことでの学習の影響が大きかったと云える。この結果からは、月経の医学的障害についての学習の影響を認めることができる。

### (3) 月経を操作することには問題があるかの認識の違いに対する学習による変化

月経を操作することには問題があるかの認識の相違に対する学習による変化に違いがあるかの結果において、f 1とf 2という月経への否定的な認識は、f 1の「はい」は有意ではなかったが、f 2は有意に高くなった。また、「いいえ」のf 1とf 2はより強まった。f 3は学習後有意に低下した。f 4は「はい」は有意に減少したが、「いいえ」は変化しなかった。月経の医学的障害について学んだ結果、月経を操作することに否定的な認識は変化して、操作して抑制することへの問題意識が低下した。

川瀬 (2009a) の調査では、健康な月経を人工的に停止させたり復活させたりすることについて70%以上の回答者が問題があるとした。その理由は、身体的影響があるとするものが77.3%、自然尊重とも言えるそのまま自然が良いとするものが22.7%であった。これらのいずれもの考えの根底にあるのは、生理的現象である月経には、人工的な介入は望ましくないという考えである。月経の医学的障害への対策として、介入（操作）が有益であるとしても、その導入においては正確な情報の提供が必要である。一方、女性達が認識している月経を操作することは問題とする論拠が曖昧であるとの指摘もあり（性と健康を考える女性専門家の会、1998）、月経のある女性達に抑制することについての正しい知識を教授する必要がある。この問題について、女性が自ら判断ができるようになるための教育が必要である。

## 結論と今後の課題

今回の調査結果から、1回の学習で月経への認識が変化することが明らかになった。しかし、月経への肯定的な認識は否定的な認識を上回っており、特に月経がないことへの危機感は強く他の認識を上回ることが示された。この結果からは、月経の医学的障害という問題を専門家はどれほど重要視しているのか、またその対策として月経を抑制することが適切な対処法であるのか。もし抑制が望ましい対処法であるとするならば、この問題に関わる専門家はその利点と不利点についてそれぞれの立場から正確な情報を提供する必要がある。心理学の立場からは、月経に対するアンビバレントな心理への援助を提供する責務があろう。

そして、この問題を医療の問題とするのみならず「生命倫理」の問題とする視点も必要である（川瀬、2009a, 2009b, 小林、2008）。健康な人間を病とする行為は、社会学者が「医療化」という言葉を用いてその危険性を警告している。医療化は、「……ひとりひとりのア

イデンティティ消失の危険性とこれから帰結する責任概念とそれに伴う法および倫理概念崩壊の恐れである」(カス, 2005)と述べる。女性達が自然への介入として月経の操作的な抑制に否定的なのは「生命は, 自己保存の可能な自己調整のはたらきを持った構造をそなえている。」(カンギレム, 1987, 2007)との考えが浸透しているからであろう。この認識を否定することがないように, 随伴症状に苦しむ現実に対処することができる援助が十分なされること。それによって女性達が月経は女性の象徴であり健康の証であるとの実感を確たるものとし, 女性の特性としての周期性のある身体を肯定できること。そして, 女性たちが自己実現の一つとして, 出産を望んでいるなら, その目的が果たされるために必要なときに正常な月経周期が保証されることについて, あらゆる観点からの情報と選択肢を女性達に提供すること。これらのことは, この問題に関わる専門家の責任として, それぞれの立場から果たされなければならないだろう。

(本研究の一部は, 第40回日本女性心身医学会学術集会で発表した)

## 文 献

- 市川伸一・大橋靖雄・浜田知久馬 1987 竹内啓(監修) SASによるデータ解析入門「第1版」東京大学出版会。
- カンギレム, J. (滝沢武久訳) 1987 正常と病理 法政大学出版局。
- カス, R., L. (編) (倉持武訳) 2005 治療を超えて—バイオテクノロジーと幸福の追求 大統領生命倫理評議会報告書 青木書店。
- 川瀬良美 2006 月経の研究—女性発達心理学の立場から— 川島書店。
- Kawase, K. & Matsumoto, S. 2006 Peri-menstrual syndrome (PEMS): Menstruation-Associated Symptoms of Japanese College Students According to Prospective Daily Rating Record, *Journal of Japanese Psychosomatic Obstetrics and Gynecology*, 11, 43-57.
- 川瀬良美 2009a 女性発達における月経の意義と月経不要論—大学生の月経に関する認識からの検討— 淑徳大学総合福祉学部研究紀要第43号, 49-70.
- 川瀬良美 2009b 月経指導における月経の意義と月経不要論の展開 淑徳心理臨床研究, 37-52.
- 小林秀樹 2008 「『月経』は果たして必要なのだろうか?」という問について筆者の問に対する私信による回答。
- 松本清一 2001 コメント 玉田太朗「月経」は果たして必要なのだろうか? 米国・シーガル博士の講演より 家族と健康, 第568号 (社)日本家族計画協会。
- MSG研究会(代表 松本清一) 1990 月経に関する意識と行動の調査, 自治医科大学看護短期大学内(MSG研究会)。
- Segal, S. J. 2001 MENSTRUATION RELATED MEDICAL DISORDERS 日本産科婦人科学会誌, 53, 208 (S-134).
- 性と健康を考える女性専門家の会(編) 1998 「ピルと女性の健康」性と健康を考える女性専門家の会。
- 玉田太朗 2001 「月経」は果たして必要なのだろうか? 米国・シーガル博士の講演より家族と健康, 第568号 (社)日本家族計画協会。

## The Effects of an Educational Lecture about Menstrual Disorders on College Students

KAWASE, Kazumi

The purpose of this study was to examine the effects of an educational lecture about menstrual disorders on college students. One hundred fifty one students were asked to answer a thirty item questionnaire that was carried out between lectures on two occasions as a pre- and post- test at four week intervals.

After the factor analysis, four factors were identified: Factor 1: Menstruation is only necessary for childbirth, Factor 2: The elimination of menstruation from daily life, Factor 3: Menstruation is a symbol of womanhood, Factor 4: The cessation of menstruation is a health crisis for a woman. These factors showed that whereas factors one and two had a negative meaning, factors three and four were positive.

The results of a paired t-test analysis to compare the pre- and post- test score showed that factors 1 and 2 were significantly increased in the post test scores but, in comparison, factors 3 and 4 were significantly decreased.

The results showed that even the one lecture affected the recognition of menstruation on a negative side. However, there was a difference in that the average scores of the factors showed that the positive factors were significantly higher than the negative factors.

The author discussed the psychological ambivalence in college students in coping with menstrual related disorders.